

平成 25 年度教職大学院派遣研修研究報告書

派遣者番号	25K20	氏名	藤原 寿幸
研究主題 —副主題—	学級集団アセスメントを活用した学級経営 —教師支援の視点から—		
所属校	小平市立小平第十一小学校	派遣先	早稲田大学教職大学院

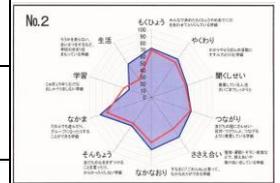
項目	内容
I 研究の目的	<p>ある学級の状況を見たときに、教師によって見方が違うということは珍しくない。例えば、その学級を1組の教師は「落ち着いていて、静かなよい学級」と見て、また2組の教師は「意欲がなく、主体性の低い学級」と見てしまう齟齬である。これは、教師一人一人が理想とする学級像の相違や、考え方の違い、学級をアセスメントする能力の差に起因すると考えられる。この問題を「多様性」という言葉で安易に放置してしまうと、保護者や児童の教師に対する不平等感につながったり、学校や学年として、チームで動くときの足枷になったりする可能性がある。また、本当は修正すべき指導について誰にも助言を受けることなく「先生がそれでよいならよいのでは」と自分の指導について改善する機会を減らすことにもなりかねない。若手教員が全国的に増加している現在、このような状況は好ましくない。教員の多様性は尊重しつつ、それでも「どういう学級を目指すか」、「自分の指導の優れている部分と課題を要する部分はどこか」ということについて他者と語り合えるための指標(共通言語)が必要だと考える。経験が少ない若手教師でも、援助者(スクールカウンセラーや先輩教員)と共に学級の状態を可視化できる学級集団アセスメントツールを活用し、指標に基づいたコンサルテーションを積み重ねることにより、学級の状態に合った、教育効果の高い学級経営を行えるのではないかと考えた。</p>
II 研究の方法	<p>活用した学級集団アセスメントツールは以下の二つである。</p> <p>(1)「楽しい学校生活を送るためのアンケート Q-U」(以下 QU と表記)(河村、1999) 「学級満足度尺度」(承認得点と被侵害得点により児童の学級への満足度を測定)と「学校生活意欲尺度」の二つの心理テストから構成された標準化された心理尺度</p> <p>(2)「学級力向上プロジェクト」(田中、2013) 学級力アンケートによる学級力の自己評価、学級力レーダーチャートを基にして話し合うスマイルタイム、学級力向上のために子供たちが主体的に取り組むスマイル・アクションという三つの活動を R-PDCA サイクルに沿って実践する共同的問題解決学習 報告者がコンサルタントとなり、学級集団アセスメントツールの結果や授業観察を基にした、対象の教師とのコンサルテーションにより、より効果的な学級経営について検討し、それに基づいた実践を行った。対象は以下の2名である。</p> <p>○A教諭…公立小学校2学年(児童数 28 名)担任。20 代女性。教職歴4年目。初めての低学年担任で少し不安を抱えている。自助資源は深い教育的愛情と向上心である</p> <p>○B教諭…公立小学校4学年(児童数 35 名)担任。30 代男性。教職歴5年目。学級のルール作りやその徹底にやや苦勞している。自助資源は教育に対する情熱である。</p>
III 研究の結果	<p>(1)A教諭について(QUの活用)</p> <p>A教諭との面接や授業観察、QU(1回目6月実施)の分析により、A教諭の学級経営について、「児童への要求レベルが高い」、「指導方法が学級の実態や発達段階、認知特性に応じた手法になっていない」、「学級づくりにおいて、リレーション形成の意識がやや薄い」、というアセスメントを行った。それを受け、以下の4つの方針をコンサルテーションで確認した。①「自分で考えて主体的に」という要求を見直し、指示されてできたことは認める(ほめる)。到達しなくても努力は認めるという意識をもつ。②授業や活動を指示する場面では、1時間の活動内容を板書したり、写真やポスターや拡大資料を黒板に掲示したりして、「視覚的な情報伝達」の手法も意図的に活用する。指名法も工夫する。③②の手法などを効果的に活用し、日常的な活動、係や当番、その役割を明確にし、ルーティン化を図る。④帰りの会など、日常の中に児童同士の触れ合いが形成されるような活動を取り入れたり、構成的グループエンカウンターを計画的に実施したりする。この四つの方針に基づき、焦らず段階を踏みながら、計画的に教育実践とコンサルテーションを展開した。</p> <p>11月に2回目のQUを実施した。学校生活満足群は50%(前回43%)、非承認群は32%(前回39%)、侵害行為認知群は7%(前回4%)、学級生活不満足群は11%(前回14%)となっ</p>

た。1回目(6月)の承認得点の平均値は16.79点(標準偏差3.14)、2回目(11月)の承認得点の平均値は18.14点(標準偏差3.63)であった。承認得点に関して、対応のあるt検定を行ったところ、 $t(27)=-2.146$ ($p<.05$)となり、2回目の承認得点は、1回目よりも5%水準で有意に高かった。このことから、クラス全体の承認得点の向上を確認できた。A教諭の学級経営の改善に伴う、学級の変容を実感としてだけでなく、調査による結果によって客観的にとらえることができ、それがA教諭の自信につながったと考えている。

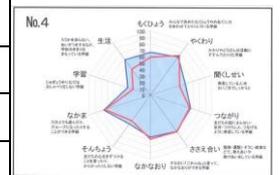
(2) B教諭について(「学級力向上プロジェクト」の活用)

「学級力向上プロジェクト」を活用したB教諭との主な取組内容を以下のようにまとめた。5月のコンサルテーションでB教諭とおおまかな計画を共有し、実践を開始した。

月	主な取組内容
5月	○話し合い「よいクラスってどんなクラス」 ○第1回学級力アンケート○第1回スマイルタイム(診断・課題の明確化)
6月	○第2回スマイルタイム「1学期パワーアップアクションを考えよう」 P「パワーアップめあて」開始 P「いじめ」に関する道徳授業の実施 P「パワーアップ標語」の作成
7月	P構成的グループエンカウンター「たんでいごっこ」の実施 ○第2回学級力アンケート ○第3回スマイルタイム(診断・課題の明確化)
9月	○第3回学級力アンケート ○第4回スマイルタイム(診断・課題の明確化) ○第5回スマイルタイム「2学期パワーアップアクションを考えよう」 P帰りの会で「花丸発表」開始 P「魂の運動会標語」作成
10月	P「学習ルール」作成
11月	P構成的グループエンカウンター「☆いくつ」の実施
12月	○第4回学級力アンケート ○第6回スマイルタイム(診断・課題の明確化) ○「決意のはがき新聞」作成 ※P…パワーアップアクション



7月のレーダーチャート



12月のレーダーチャート

コンサルテーションでいつも話題になったのは「学習ルール」であった。「学習」の項目はアンケート1回目以来、数値が下がり続けたので、「学習ルール」に特化したアクションの実施を提案した。「授業や学習のことで『このままじゃいけない!』と思うこと」について、全員分の意見をまとめ、全児童に配布した。それを読み合う活動を通して、友達の困り感、なんとかしたい気持ちなどを全員で共有した。その後B教諭と児童とで、「学習ルール」を作成し、教室に掲示して定着を図った。

第4回学級力アンケートではパワーアップアクションで意識して取り組んできた「目標」「学習」を中心に、3回目より全体的にレーダーチャートが大きくなった。「学習ルール」の作成の過程と意識付けが今回の結果につながったことをB教諭と共に確認した。

IV考察

現場では「よいクラス」、「荒れているクラス」、「素直なクラス」など学級の状態を曖昧に表現することが多い。曖昧なアセスメントでは効果的な指導には結び付かない。学級を見る視点が明確になることが学級集団アセスメント活用の利点である。本実践でQU、学級力アンケートの各々の視点で学級を把握し、それを指標としてコンサルテーションを行い、それに基づいた教育活動を実践し、以上のように各々よい方向に向かう結果を得た。

それぞれのツールの利点として、QUについては尺度の信頼性と妥当性の高さがA教諭を勇気づける際に効果的であり、一方、学級力アンケートについては「公開可能」という特性により、児童による主体的な学級づくりが可能になることが改めて実証された。

また、指標に基づいたコンサルテーションは、それぞれの教諭に対する、さまざまな援助を可能にした。ツールの意義や学級経営の理論についての情報提供は情動的援助、可視化されたデータや授業観察に基づき、指導について検討する際は評価的援助、悩みを聞いたり、がんばりを認めたりする際は情緒的援助を行うことができた。教師もただ「がんばっているね」と言われるより、指標に基づいて認められたほうが、承認感が高まる。

本研究を通して、今回活用した二つの学級集団アセスメントツールは、学級の実態に応じた学級経営を可能にするだけでなく、若手教員に対するスーパーバイズ、OJT、学年会、校内研修の共通言語ツールとして有効な手だてになることが示唆された。

